

アメリカ詩の20世紀、そして21世紀 ——大衆化と革新性の行方——

長 畑 明 利

1998年4月22日の夜、ホワイトハウスで Millennium Evening が開催された。アメリカ人の創造性と発明の才に光をあてるという目的で開かれた都合4回の催しの3番目のもので、その夜は The American Voice in Poetry と銘打たれていた。3人の桂冠詩人 (William Hass, Robert Pinsky, Rita Dove) が招かれ、彼らは、ファーストレディー Hillary Clinton が Howard Nemerov の “The Makers” を朗読したのに続いて、アメリカ詩の古典の数々を読み上げ、またインターネットを通して寄せられる質問に答えて、新しい千年紀の詩の姿について話したのであった (<http://clinton4.nara.gov/Initiatives/Millennium/poets.html>)。その夜からすでに4年半、新しい千年紀は3年近くが過ぎた。だが、新しい時代の詩の姿はいまだはっきりとは見えない。21世紀の詩について考察するために、ここであらためて20世紀のアメリカ詩を振り返ることに意味があろう。以下、20世紀末に行われた「ベスト」選びなどの試みをいくつか紹介しながら、前世紀の詩の流れと今世紀の詩の姿について考えてみたい。

20世紀の「ベスト」32人

20世紀のアメリカ詩については、世紀の終わりに、数多くの雑誌や新聞が詩の回顧、あるいは「ベスト」選びの企画を打ち立てていた。手近なところでは、David Lehman 編になる *The Best American Poetry* というアンソロジーの「ベスト」選びがある。*The Best American Poetry* というシリーズは、毎年一人の詩人または批評家(あるいは翻訳者)がゲスト・エディターとして前年に発表された詩の中からその年の詩のベスト版を編むもので、1988年の John Ashbery から2002年の Robert Creeley まで、これまでに15人のゲスト・エディターによる15冊のアンソロジーが発行されている。このうち2000年のアンソロジー——*The Best American Poetry 2000* (Scribner, 2000)——は、巻末に、1988年から2000年までの13人のゲスト・エディターに本書のシリーズ・エディターである Lehman 自身が加わった14人が、それぞれ15篇ずつ選んだ「20世紀のアメリカ詩トップ15」(top fifteen American poems of the twentieth century) を掲載し、さらに、その詩が最低2人の選者によって選ばれた詩人を「20世紀アメリカ最高の詩人たち」(The Best American Poets of the Twentieth Century) として並べている。13人のゲスト・エディターは次の通りである——John Ashbery (1988), Donald Hall (1989), Jorie Graham (1990), Mark Strand (1991),

Charles Simic (1992), Louise Glück (1993), A. R. Ammons (1994), Richard Howard (1995), Adrienne Rich (1996), James Tate (1997), John Hollander (1998), Robert Bly (1999), Rita Dove (2000)。

ここで14人が選んだ「トップ15」を逐一紹介することはできないが、最終的に「20世紀アメリカ最高の詩人たち」として選ばれたのは次の32人である——A. R. Ammons, W. H. Auden, John Ashbery, John Berryman, Elizabeth Bishop, Gwendolyn Brooks, Hart Crane, Robert Creeley, T. S. Eliot, Robert Frost, Robert Hayden, Langston Hughes, Randall Jarrell, Kenneth Koch, Robert Lowell, James Merrill, Marianne Moore, Frank O'Hara, Sylvia Plath, Ezra Pound, Kenneth Rexroth, Edwin Arlington Robinson, Theodore Roethke, James Schuyler, Delmore Schwartz, William Stafford, Gertrude Stein, Wallace Stevens, Robert Penn Warren, Richard Wilbur, William Carlos Williams, James Wright。

この顔ぶれを見て、なるほどと思うことも、意外と感じることもありうるだろう。この手の「ベスト」選びには「遊び」の要素が強く、往年の名選手をピックアップして20世紀のベストナインあるいはベストイレヴンを選ぶようなところがある。実際、Glück は、「ベスト」を選ぶことは結局自分の好みを言うことであり、15人だけを「好む」ことは不可能だという説明文を書いてベストを選びを拒んでいるし、同じくベスト選びへの参加を拒否した Rich は説明文すら書いていない。Donald Hall と Mark Strand, そして Richard Howard は生きている詩人は入れないとしているし、Jorie Graham は自分のリストはあくまで自分が好む詩を並べたものだという断りを入れている。Ashbery は6人、Ammons は3人、Lehman は5人の「補欠」を加えており、Graham と Howard は16人目を選んでいる。一部の例外を除いて、ゲスト・エディターたちがどのような観点で「ベスト」を選んでいるのかの説明はないし、そもそも毎年のゲスト・エディターの顔ぶれそのものが恣意的なものだとも言える。20世紀末から振り返った20世紀のアメリカ詩のベストが、あくまでその時点を支配する文学的嗜好に基づいてなされていることも了解しておく必要がある。

ビートの黙殺

そうした数々の留保事項にも拘わらず、このリストは20世紀のアメリカ詩を振り返るための手がかりをいくつか提供してくれる。例えば、この32人の顔ぶれを眺めてすぐに気づくことは、ビート詩人が入っていないことだ。20世紀のアメリカ詩人ベスト32から Allen Ginsberg の名が抜け落ちているのは奇妙なことではなからうか。多くの文学史において、50年代末のビートの出現は重要な文学的事件として扱われ、日本でもビー

ト詩人の人気は高い。2001年の英文学会のシンポジウムで行った「20世紀のベスト」アンケート*でも、Ginsbergの人気は低くない。しかし*The Best American Poetry 2000*の「ベスト」選びでは、Doveがトップ15の中に「Howl」を含めているほかは、Hollanderが、もし自分が挙げたEliotとAudenが国籍あるいは出身地ゆえにアメリカ詩人として認められないのなら、Ginsbergの“America”かAnthony Hechtの“The Venetian Vespers”をと注記しているだけで、Ginsbergは、2人の選者から選ばれるという「20世紀アメリカ最高の詩人たち」選出の条件を満たさなかった。同じくビート詩人の代表とされ、日本で人気の高いSnyderの詩にいたっては一人の編者も選んでいない。

同様に不在が際立つのはAdrienne Richだろうか。70年代以降フェミニズム詩の第一人者として教祖の風格さえ漂わせていたRichの詩を自身の15篇に入れた選者はこれまたDove一人であった(Doveが選んだのは“Diving into the Wreck”)。また、ビート詩と並んで1960年出版の*The New American Poetry*の中核をなしたBlack Mountain派の詩人も影が薄い。かろうじてCreeleyが入っているとはいえ、“Projective Verse”で一世を風靡したCharles Olsonや“Open Form”を唱えたDenise Levertov、あるいは、アンソロジーの常連Robert Duncanらの名前はない。またWhitman以来の民主主義的な口語詩の伝統を担ったEdgar Lee Masters, Vachel LinseyあるいはCarl Sandbergの詩も一篇も選ばれていない。南部農本主義に拠ったFugitiveグループも、Robert Penn Warren以外は選に漏れている。60-70年代に活躍したDeep Imagismの詩人としてはJames Wrightが選ばれているが、Robert Blyの作品は一篇も選ばれていない。人種構成を見ると、32人中黒人が3人(Brooks, Hughes, Haydon)、あとの29人は白人である。女性は5人、27人が男性である。

一方、多くの編者から支持された詩人を票の多い順に挙げてみると、Frost(12), Bishop(11), Crane(10), Stevens(10), Eliot(9), Williams(9), Moore(7), Ashbery(6), Merrill(6), Auden(5), Pound(5)となる。(ただし、編者のSimicはFrostとBishopの詩をそれぞれ2篇ずつ選んでいる。)Stevens, Eliot, Williams, PoundそしてCraneというモダニズムの巨人たちが上位を占めていること、Frost人気が根強いこと、生存する詩人で唯一Ashberyの名前が見られることなどが目につくが、その一方で、モダニズム詩人のなかでもPoundの票が低いこと、上位に位置づけられた詩人がすべて白人であることには注意していただろう。またPlath(2), Lowell(4)が32人の「20世紀アメリカ最高の詩人たち」には選ばれたものの、ベスト10にはほど遠く、意外に支持が低いことは興味深い。それにひきかえ、いわゆるNew York派の詩人は、ベスト8のAshberyを筆頭に、最終32人のなかにKoch, O'Hara, Schuylerと4人が

入っている。MooreやMerrillなどニューヨークゆかりの詩人たちも選ばれているので、このベスト選びが知的でスマートで都会的な詩風の詩人に偏向しているという見方はできる。そしてそれは編者の顔ぶれの偏向のゆえであるとも言える。ちなみに単独の詩で最も多く支持されたのは、Eliotの“The Waste Land”(4)とAudenの“In Praise of Limestone”(4)だが、Audenのこの詩を選んだ編者はAshbery, Graham, Strand, Lehmanという顔ぶれであった。

20世紀アメリカの詩史

数多くの詩人のなかから誰を選んで「ベスト」の顔ぶれを揃えるか、あるいは、20世紀のアメリカ詩のアンソロジーに誰を入れるかという問題は、20世紀のアメリカ詩の伝統がどのようなものだったかをめぐる議論に直結する。文学史において、20世紀のアメリカ詩のセクションは、世紀前半のPound, Eliot, Williams, Stevens, Craneらモダニズム詩人、南部のFugitiveグループ(Ransom, Tateら)、戦後50-60年代の「告白詩人」(Lowell, Berryman, Plathら)、「ビート詩人」、Black Mountain派(Olson, Creeley, Duncanら)、New York派(Ashbery, O'Haraら)、60-70年代のDeep Imagists(Bly, Wrightら)、80-90年代のL=A=N=G=U=A=G=E poetsやNew Formalistsという具合に、新たに出現した詩的動向を年代別に並べた系譜として記述されることが多い。これはアメリカ詩の源流にパウンドらのモダニズム詩を置き、それ以後現れた「新しい声」に着目して形成された詩史と言える。パウンドが主導したImagismやVorticismを思い起こせば分かるように、新しい詩法の提示は、往々にして新しい文学理念の実現を意味し、それゆえ、この種の詩史は、新しい詩的「理念」の歴史という性格を帯びる。*The Best American Poetry 2000*の「ベスト」選びで、モダニズムの詩人が上位を占めたことは、選者たちの「好み」がこうした詩史の前提と齟齬をきたさないことを物語っている。

もっとも、こうしたタイプの詩史からは、伝統的なスタイルで地道に詩を書く詩人が漏れてしまうことがある。FrostやBishopを何らかの「理念」と結びつけることは難しい。上記の「ベスト」選びでは、モダニズム詩人と並んで、FrostやBishopの人気が高いという結果が出たが、この投票はゲーム感覚で行われたとはいえ、「理念」中心の詩史からはこぼれ落ちる嫌いのある、地味ながら魅力ある詩人を適切に拾い上げたと言っただろう。

もちろん、20世紀のアメリカ詩の流れを振り返る際に、モダニズムを源流とする新動向の羅列とは異なる観点に立つことも可能である。例えば、アメリカ詩の偉大さは人種的多様性にあるとする立場に立てば、20世紀のアメリカの詩史は、Hughesをはじめとするハーレム・ルネッサンスの詩人、Jimmy Santiago Bacaらのチ

カーノ詩人、Lawson Iso Funada らアジア系詩人などに焦点をあてるのみならず、Angel 島でアメリカへの入国審査を待つ中国人が残した漢詩や、日系アメリカ人が収容所で書いた俳句、あるいは W. C. Handy のブルースやユダヤ系移民が書いたイディッシュ語による詩などをも含むものとなるだろう。実際、こうした人種的多様性に気を配ったアメリカ詩のアンソロジーも少なくない。Carey Nelson 編集による *Anthology of Modern American Poetry* (Oxford UP, 2000) はその一例であるし、The Library of America の *American Poetry: The Twentieth Century* (2 vols.; 2000) も例外ではない。どちらのアンソロジーも、モダニズム詩人をその源流とする新しい声の系譜を押さえつつ、その一方で、人種のバランスに目を配り、詩人の選択に多文化主義的観点を加えている。

一方、モダニズム以来の詩的理念の系譜ではなく、アメリカの詩をより親しみやすいものとして見る見方も可能である。革新的で、壮大な、そして往々にして難解な詩をアメリカ詩の歴史の源流に据えるのではなく、多くの人にわかる、民主的で平易な詩こそがアメリカ詩の伝統を形成してきたとする立場である。こうした方針に基づく 20 世紀アメリカ詩のアンソロジーは 20 世紀末には、またそれ以後も、編まれていないようだが、昨今は、インターネットを用いた類似の試みが多い。例えば——20 世紀のアメリカ詩のアンソロジーを編むことを意図したものではないが——1997 年にアメリカの第 39 代桂冠詩人となった Robert Pinsky が始めた “Favorite Poem Project” なる試みがある。これは詩の愛好者に、電子メールあるいは手紙によって、自分の好む詩を自由に送ってもらうというプロジェクトである。Pinsky によれば、呼びかけに応じて、1 年間に 18,000 人が自分の好む詩を送ってきたというが、そのうちの 200 篇が *Americans' Favorite Poems: The Favorite Poem Project Anthology* (Norton, 2000) と題されたアンソロジーにまとめられ、出版された。同時に、Clinton 夫妻を含む 50 人が好みの詩を朗読し、その詩が自分にとってどのような意味を持つかを語るビデオ (Favorite Project Videos) が Real video のフォーマットでオンライン化されている (<http://www.favoritepoem.org/>)。一方、インターネット上最大の詩のサイトとされる poetry.com は、“100 Greatest Poems Ever Written” や “100 Greatest Love Poems Ever Written” といったコンテストを行い、その結果を公表している (<http://www.poetry.com/>)。

詩の大衆化

こうした試みが示すように、20 世紀末においては、詩を大衆的な、親しみやすいものとして捉えようとする傾向がとりわけ強いように見受けられた。*The Best American Poetry 2000* の “Foreword” で David Leh-

man は、1999 年現在のアメリカ詩の現況を報告しつつ、アメリカでは退潮が伝えられていた詩の復活を見ることができると主張しているが、ここで「詩の復活」というのは、詩が一般大衆に受け入れられているという意味に他ならない。

Lehman によれば、インターネットのサーチ・エンジン Lycos の報告において、“poetry” は検索項目のアクセス数で *Pokemon* や *Star Wars* に続いて第 8 番目に位置しているし、MTV の人気アニメーション *Daria* には、主人公の高校生 Daria が授業の課題で老人ホームへ行き、Ginsberg の “Howl” を読む——“I saw the best mind of my generation destroyed by madness . . .”——というエピソードがあった。保険会社の大手 AIG はテレビコマーシャルで Eliot の “The Love Song of J. Alfred Prufrock” を引用し、プロフットボール New York Jets のヘッドコーチは、引退の際のスピーチで Dale Wimbrow という 30 年代のマイナー詩人の詩 “The Guy in the Glass” を朗読した。インターネット上には数多くの poetry chat room が開設され、Robin Travis という人が運営するサイトには毎月 100,000 人の詩人がアクセスしてくるといふ。poetry slam と呼ばれる詩のコンテストは全米 30 の都市で行われ、元大統領 Jimmy Carter の詩集刊行が話題になる一方、前大統領 Bill Clinton が Monica Lewinsky に Whitman の *Leaves of Grass* を贈ったことがメディアで大きく採り上げられた。1996 年以来、4 月は National Poetry Month と命名され、Academy of American Poets が様々な催しを企画している。2001 年には American Poet Stamp Project という催しが行われ、新しい切手の図柄にどの詩人を選んでもほしいかを募集した。最多票を獲得して選ばれたのは Langston Hughes であった。

詩の大衆化は詩集の売り上げからも推測することができる。Mallay Charters によれば (“The Different Faces of Poetry,” *Publishers Weekly* [March 3, 1997])、90 年代の詩集の売れ行きは好調で、1996 年には 463 の出版社から 1,127 冊の詩集が出版された。その多くは desk top publishing による小出版社 (small press) であるというが、売れているのは必ずしも一般読者にわかりやすい、伝統的な詩形で書かれたものばかりではない。*Poetry like Bread* (1993) という多文化主義的性格を持つアンソロジーが 9,000 部、パンクロック詩人という触れ込みの Dave Alvin の *Any Rough Times Are behind You* (1995) が 5,000 部売れた一方で、Jorie Graham の *The Dream of the Unified Field* (1995) は 8,500 部、言語詩人 Charles Bernstein の *Dark City* (1995) も 4,000 部を売ったという。

革新性の詩史

Lehman らの主張を信じる限り、アメリカでは詩の民主化が進み、以前よりも多くの人々が詩を読んでいる

ように見える。しかし、より多くの人々が詩に関心を持つことは、必ずしもより多くの優れた詩が書かれていることを意味するわけではない。Lehman 自身も言うように、その多くが bad poetry であることは否定できない。インターネットで公表される詩には独りよがりのものが多いし、ポエトリー・スラムにしても、ときに優れた詩人が出ることがあるとはいえ、自己満足的な、センチメンタルな詩も多い。Lehman は、そうした bad poetry もまた good poetry に良い影響を与えていると主張しているが、その一方で、bad poetry への、そして詩の民主化自体への批判も根強い。

例えば、言語詩人 (L=A=N=G=U=A=G=E poet) の Charles Bernstein は、PBS ラジオの番組 “All Things Considered” で、詩は日常言語とは異なるものであり、その限りにおいて、本質的に難解なものである。それゆえ、それを理解することのできる人の数が多いというわけにはいかず、内容を薄めて、より多くの人にわかりやすくしようとするのは誤りだ、と主張する。彼はさらに、昨今の詩の大衆化の試みを皮肉って、「National Poetry Month などはやめて、いっそのこと詩を読んではいけないという International Anti-Poetry Month という企画を提案したい」と言い放って番組を締めくくっている (<http://www.npr.org/ramfiles/atc/20010419.atc.09.ram>)。

Bernstein の主張は、詩の民主化の対極に「芸術性」あるいは「革新性」を重視する詩を置く立場を代弁するものと言える。詩を卓越した言語芸術として捉え、それを素人の習作と峻別しようとする立場である。20 世紀のアメリカ詩の源流をパウンドらのモダニズム詩の革新性に求め、その後の詩史を革新的な詩的「理念」の系譜と見なす見方は、本質において、この Bernstein の主張と重なり合うものだ。20 世紀のアメリカ詩の伝統は「優れた詩」のそれであり、その伝統は、詩人たちが新しい時代に即した新しい詩のあり方を主張する芸術的「革新性」に基づいているというのである。

実際、「革新性」(innovativeness) に注目して編まれたアンソロジーも少なくない。一例をあげれば——これもアメリカ詩に限定されるものではないが——Jerome Rothenberg と Pierre Joris 編の *Poems for the Millennium: The University of California Book of Modern & Postmodern Poetry* (2 vols.; U of California P, 1995, 1998) がある。このアンソロジーは、未来派、表現主義、ダダ、シュルレアリスムといった 20 世紀世界文学の様々な革新芸術運動の重要項目を縫うようにして、Stein, Mina Loy, e. e. cummings, Louis Zukofsky, George Oppen, Melvin B. Tolson, Lorine Niedecker, Jackson Mac Low, Charles Bernstein, Susan Howe, Lyn Hejinian, Ron Silliman らを含むアメリカの革新的な詩人の作品を収録している。“Introduction” で編者らは、本書は「私たち人類の考え方と行動のあり方を

変えるための必要条件として、詩と芸術の方向を変えようと努めてきた国際的および国内的運動」に力点を置いていると言うが、こうした観点に基づいて拾い上げられる本書のアメリカ詩人の顔ぶれは、モダニズム詩に力点を置く多くの詩史のそれに比べても、はるかにラディカルなものとなっている。

詩の二極化

20 世紀末においては、詩の大衆化の動向が強まる一方で、革新的な詩を擁護する声も存在するという、詩をめぐる二極化の様相が見て取れる。その両者が互いの主張をぶつけ合う一方、両者には鋭い批判も投げかけられている。詩の大衆化の試みに対しては、それが bad poetry の氾濫をもたらすという批判がなされる一方、「革新的」な詩は極度に難解なものになってしまい、しかも、それらの作品は、しばしば作品の背後にある「理念」を説明されない限り理解することすら困難になってしまったと批判される。

もっとも、後者の批判に関して言えば、かつて Stein や Ginsberg といった革新的な詩人のスタイルがメディアによって広められ、一般に認知されたことからわかるように、前衛的な詩がメディア等の作用によってその前衛性を失うこともないわけではない。「言語詩」のような芸術志向の強い前衛詩のスタイルも、コマーシャルイズムに絡め取られて一般化され、草の根の詩人たちの作風に浸透していく可能性がある。実際、「言語詩」はあくまでアヴァンギャルドであり、一般読者を寄せつけぬ、エリート主義的言語芸術であるとする批判があるにも拘わらず、先に触れた Charters によれば、Bernstein の作品のような難解な詩集の売れ行きも悪くない。最近では、かつてアカデミズムを嫌悪していた言語詩人たちが大学で tenure 職を獲得しているし、また 1999 年に、前述の Academy of American Poets が権威ある Tanning 賞を前衛詩人 Jackson Mac Low に贈ったことも記憶に新しい。他方、Pinsky 編になる *Americans' Favorite Poems* をひもとけばわかるように、アメリカの「大衆」が好む詩人は、必ずしも平易な詩人ばかりでもない。

詩の大衆化と革新性の追求という二極化は 21 世紀においても継続されることだろう。しかしその一方で、両者の接近も進んでいくような予感がある。Marjorie Perloff は *21st-Century Modernism: The “New” Poetics* (Blackwell, 2002) の “Introduction” で、新しい前衛的な詩の試みが、「21 世紀のモダニズム」として姿を現しつつあると主張しているが、その予測は前衛詩の一般的受容という形で実現されるのかもしれない。新しい時代のアメリカの詩が実際にどのような姿を帯びるのか、いましばらく見守る必要がありそうだ。

* <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/best15.html>. 掲示板を設けました。ご意見をお寄せください。
(名古屋大学助教授)

2003

1

総号1847号

英語青年

THE RISING GENERATION

●シェイクスピア論

「成り上がり者のカラス」はシェイクスピアにあらず(上) 河合祥一郎

'Too Much in the Sun'——ハムレットとアナモルフォーズの宇宙 蒲池美鶴

●連載ほか

アメリカ詩の20世紀、そして21世紀——大衆化と革新性の行方 長畑明利

岩倉使節団のマンチェスター〈回覧実記〉 松村昌家

否定辞notの位置について 安藤貞雄

リレー連載：英語二重目的語構文の全体的検証 大庭幸男

語法研究 江口 巧



エドワード・バーン=ジョーンズ「欺かれたマーリン」(1874)

KENKYUSHA